

原 著

社会的養護児童と地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程 —社会的養護児童の子育ての社会化に注目して—

The process in the formation of relationships between the children in social care and the
“people, things and affairs” in the region; focused on socializing child-rearing

井上 寿美*¹, 笹倉千佳弘*²

要約：本研究の目的は、児童養護施設で育つ社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程を、社会的養護児童の子育ての社会化に注目して明らかにすることである。「ホームステイ事業」に参加した社会的養護児童のエピソードをとりあげ、「生きられた経験」の観点から分析を加えた結果、社会的養護児童の子育ての社会化において、①無意味な関係から有意な関係が形成されるという過程、②一方的な関係から相互的な関係が形成されるという過程、③個人的な関係から共同的な関係が形成されるという過程が明らかになった。この結果をふまえ、次の2点について考察した。①社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間に3とおりの関係形成過程が認められたということは、社会的養護児童に認識の変化が引き起こされたということである。②社会的養護児童の認識の変化要因は、ホストファミリーによる「順接の受けとめ」である。

Key Words：児童養護施設 生きられた経験 認識の変化

1. 目 的

本研究の目的は、児童養護施設で育つ社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程を、社会的養護児童の子育ての社会化に注目して明らかにすることである。

先行研究によれば、子育ての社会化に関しては、育てる主体である親の側から議論されたものが多く、育つ主体である子どもの側から議論されたものは、管見の知る限り、森田と網野の論稿のみである（井上2012）。森田（2000）では、子どもが仲間のいる社会化された場所を獲得することに子育ての社会化の意義があると述べられている。網野（2000）では、子どもが親以外の社会的親による多様なモデリングを獲得することに子育ての社会化の意義があると述べられている。いずれの議論も子どもの側から論じられているが、親による養育に期待することが容易である子どもを対象としており、親による養育に期待することが困難な社会的養護児童を対象としてはいない。

なお本稿では、子育ての社会化ということ、森田（2000）に依拠し、子育てという行為を個別化、個人化、私有化させずに集団化あるいは公然化させ、社会で共有することであるととらえている。したがって、社会的養護児童の子育ての社会化とは、親による養育に期待することが困難である子どもを育てるという行為を、児童養護施設の職員だけで担うというように、個別化、個人化、私有化させたものとせず、その行為を、地域の人たちも施設の職員と共に担うというように、集団化、公然化させたものにするということであると理解している。

2. 方 法

2-1. 調査目的・内容

岩手県西和賀町¹⁾で実施されている、地域養護活動としての「児童養護施設の児童を年間を通してホームステイさせる事業」（以下では「ホームステイ事業」とする）に参加した子どもと彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひ

2013年12月2日受付／2014年1月22日受理

*¹ Hisami INOUE
関西福祉大学 社会福祉学部

*² Chikahiro SASAKURA
就実短期大学 幼児教育学科

¹⁾ 西和賀町は、岩手県西部に位置し、奥羽山脈の山岳地帯に広がる、南北約50km、東西約20km、総面積は590.78km²、人口6,530人、世帯数2,437世帯（2013年4月現在）の、豊かな自然に囲まれた地域である。町の南北に和賀川が流れ、81.5%を山林が占めている。2005年に旧沢内村と旧湯田町が合併して西和賀町が誕生した。

と・もの・こと」との関係形成過程を、ホームステイ事業に関わった人の「生きられた経験」²⁾から明らかにするために、ホストファミリーに対する聞き取り調査をおこなった。ここで言うところの地域養護活動とは、日常生活から離れた地域をフィールドとして、児童養護施設の子どもを児童養護施設の職員と地域住民等が協働して養護する諸活動のことである。

ホームステイ事業とは、NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク（以下では「NPO いのちネット」とする）が中心となり、2008年5月から本格的に実施されるようになったものである。その目的は、被虐待児の「人間復興には地域の生活体験が必要」であるため、『『人・自然・文化』に恵まれている西和賀で（中略）、子どもたちの優しさを育てていく』（NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク2010:2）ことである。たとえば2009年度には、ホームステイ事業へ協力を申し出た西和賀町の5世帯が、岩手県内にあるA児童養護施設とB児童養護施設からやってきた10人の子どもを、1世帯に2人ずつ週末に1泊2日で受け入れることを、年間を通して10回おこなっている。

ホームステイ事業に参加する頻度は子どもによって様々である。複数回参加する子どもであっても、常に同じペアで参加するわけではなく、また、常に同じホストファミリーに滞在するわけでもない。『平成21年版 高齢社会白書』では、2008年5月から西和賀町でのホームステイを「延べ100人の子どもたちが体験している」（厚生労働省2009:64）と報告されている。

ホームステイ事業の前史としては、「夏季転住」（現「カタクリ転住」）と「全国・さわうちまるごと児童養護施設事業」（現「全国・西和賀まるごと児童養護施設事業」）という2つの地域養護活動の取り組みを挙げることができる。夏季転住とは、A児童養護施設の子どもと職員が夏季に1週間、西和賀町（旧沢内村）に転住し、「施設が丸ごと地域にとけ込む」（藤澤1995:9）取り組みのことである。また、「全国・さわうちまるごと児童養護施設事業」とは、地域を児童養護のフィールドと見立て、首都圏等の児童養護施設の子どもが、町の保存家屋で数日間滞在し、自然探索やボランティア活動等を体験する

取り組みのことである。

NPO いのちネットの前代表は、ホームステイ事業に取り組んだ背景について次のように述べている（NPO 法人輝けいのちネットワーク2010:1）。

児童養護施設の子どもたちは、西和賀に来ると落ち着くと言われています。それは昔赤ちゃん等の多病多死を経験し、いのちの大切さを実感している高齢者が多くいるからです。加えて、田畑や山々、暮らしの中で編み出された智恵の数々、つまり「人・自然・文化」の力があるからです。心身を病む子等には、西和賀は必要な場所となっているのです。これが、「子どもが落ち着く」という背景なのです。

では、西和賀の『『人・自然・文化』の力』を育んだ歴史とは、いかなるものだったのであろうか。町村合併で西和賀町になる以前の旧沢内村は、1955年当時でも、「豪雪、貧困、多病・多死」の三重苦を抱えていた。豪雪で村全体が半年間も雪に閉ざされ、その間、村民は収入の道が断たれるため、人々は貧困状態におかれ、十分な医療を受けることができなかったのである。しかし、深澤晟雄村長時代に「生命尊重」の気風が醸成され、旧沢内村は、65歳以上の国保被保険者に対する老人医療費10割給付（1960年）や、乳児死亡率ゼロの達成（1962年）等、全国に先駆けて保健、医療、福祉の分野で様々な偉業を成し遂げることとなった。以上が、西和賀の『『人・自然・文化』の力』を育んだ歴史である。

2-2. 調査方法

西和賀町における地域養護活動に関する実地調査はこれまでに5回実施しており、そのうち4回の調査でホストファミリーに対する聞き取り調査をおこなっている（【表1】参照）。本稿では2011年8月25日（第1回調査）にホストファミリーに対して実施した聞き取り調査から得たデータを中心にとりあげる。

調査協力者は、ホームステイ事業でホストファミリーの役割を担ったCさん（女性）を含む5名である。そのうちの2名は、NPO いのちネットの前代表と現代表である。調査では、ホストファミリーが交わすホームステイ事業に関する思い出話について筆者らが質問をするという非構造化インタビュー（約60分間）を採用した。録音はおこなわず、調査終了後にフィールドノートを作成した。

²⁾ 「生きられた経験」は、本人の主観的事実を重視してとらえられた現実である。このような立場からすると、たとえば、人がそこにいなくても「声が聞こえる」という現象も、「幻聴」ととらえられるのではなく、本人の固有の体験と位置づけられ、聴こえた声（「聴声」）ととらえられることになる（日本臨床心理学会2010）。

【表1】調査概況

作成：井上・笹倉

調査	調査期間	調査内容	
		聞き取り調査	参与観察
第1回	2011/8/23～8/28	調査協力者：「NPO いのちネット」前代表者・「NPO いのちネット」代表者・ホストファミリー・A 児童養護施設施設長・ホームステイ経験児童・「地域を考える会」メンバー・深沢晟雄資料館館長・旧沢内村元村長・旧沢内村元保健婦	
第2回	2012/2/15～2/19	A 児童養護施設施設長・A 児童養護施設職員（保育士・保健師）・B 児童養護施設職員（児童指導員）・「NPO いのちネット」前代表者・ホストファミリー・「地域を考える会」メンバー・深沢晟雄資料館館長・旧沢内村元保健婦・町立保育所所長	ホームステイ事業
第3回	2012/8/21～8/28	「地域を考える会」会員・深沢晟雄資料館館長・行政職員・ホストファミリー・事業主催実行委員会メンバー	第10回全国・西和賀まるごと児童養護施設事業
第4回	2013/2/7～2/11	「西和賀の雪を見る会」（西和賀町の将来を語る会）メンバー・「地域を考える会」メンバー・深沢晟雄資料館館長	雪あかり（地域行事）
第5回	2013/8/23～8/27	A 児童養護施設施設長・A 児童養護施設職員（保育士）・ホストファミリー・「NPO いのちネット」前代表者・行政職員・旧沢内村元村長・深沢晟雄資料館館長	ホームステイ事業

なお、上記の聞き取り調査が、調査協力者の1人が畑で収穫したばかりのスイカを持参し、皆でそれを食べながらおこなわれたものであることを付け加えておく。なぜなら、どのような状況において収集されたデータであるかを示すことは、調査協力者にとってそのエピソードがいかなるものとして位置付けられているのかを判断する上で重要であると考えられるからである。

2-3. 分析の視点

ホームステイ事業に参加したD児（小学校高学年、女兒）とD児の育ちに関わる西和賀町の「ひと・もの・こと」との関係が表れているエピソードを取りあげて分析する。なぜなら、事例の一部分であるエピソードは、「読み手の了解可能性という意味での一般性、公共性を目指すもの」（鯨岡 2005：44）であり、「他者の経験世界に可能的に開かれている」（鯨岡 2005：45）からである。そして、そもそも、質的研究のバックボーンには、人間と世界に関する次のような認識があることを確認しておきたい。「人間は、彼・彼女が生きる時代と社会に型どられた、状況関連的なコンテクストのなかでしか生きることができない、ということである。人間は、みずからの位置でみずからの役割を演じることで状況に参加し、状況を主体化する。そして、その状況は世界に繋がっている」（青木 2000：170-71）。

分析では、D児と彼女の育ちに関わる西和賀町の「ひと・もの・こと」との関係がどのように形成されていったのかについて、D児の「生きられた経験」の観点から

検討を加える。なぜなら人は、自らの身体を中心として延び広がり、絶えず生成と消滅を繰り返す「ひと・もの・こと」との多様な関係の網の目に生きているからである。

2-4. 倫理的配慮

本研究は、関西福祉大学社会福祉学部研究倫理審査委員会に承認され、日本保育学会倫理綱領、及び、日本社会福祉学会研究倫理指針に則っておこなったものである。

研究結果を公表するにあたり、個人や施設が特定されるような固有名詞は、ランダムにアルファベット表記とする等の人権に対する配慮をおこなった。また、すでに著作物等で固有名詞が公表されている場合については、固有名詞のまま表記した。

3. 結果

下記は、ホストファミリーであるCさん(女性)が、ホームステイ事業における思い出の1つとして語った(2011年8月25日)、児童養護施設の子どもであるD児(小学校高学年、女兒)に関するエピソードをまとめたものである。D児は被虐待の経験を有している。

西和賀町にやってきたD児は、Cさんに対して、最初は「こんな、なんにもないところ……」ととても不満げであった。「コンビニもない、ゲーセンもない、カラオケもない、なんにもない!」と、口をとがらせてあげつらっていた。自分が期待するようなものが西和賀町には

何ひとつなかったからである。

そのようなD児に対してCさんは、「だから、あなたたちに来てもらったの」と応答した。やがて、ホームステイを終えて帰る頃、Cさんと一緒に歩いていたD児は、Cさんに向かって、「おばさん、かわいい花が咲いている!」、「おばさん、チョウチョがとんでる!」というように、自分が見つけたものを次々と伝えるようになった。

D児にとって西和賀町は、週末に行きたいと願うような場所ではなかったのであろう。1人の知り合いもおらず、何をして2日間を過ごせばよいのかという戸惑いもあったに違いない。はるばる時間をかけてやって来たにもかかわらず、コンビニエンスストアもゲームセンターもカラオケボックスもなかったため、不満が噴出したと言える。ところが、Cさん宅でのホームステイを終えて帰る頃になると、「かわいい花」や「チョウチョ」がD児の目に映るようになった。同時にD児はCさんに、「かわいい花」や「チョウチョ」を見つけたことを伝えたいと思うようになったのである。

D児が西和賀町に滞在したのは1泊2日である。このような短い期間に、突如として、西和賀町に「かわいい花」が咲き、「チョウチョ」が舞うようになったわけではない。D児が訪れたときから西和賀町には花が咲き、蝶が舞っていたはずである。またCさんの人柄が、このような短い期間に変化したとは考え難い。

したがって、まず、D児とD児をめぐる「もの」との関わりという点から言えば、西和賀町を訪れた当初は、D児にとって目に映らなかった「もの」が、目に映る「もの」になったということである。つまり、D児と花や蝶との間には、当初、無意味な関係しか形成されなかったが、やがて、有意義な関係が形成されたということである。

次に、D児とD児をめぐる「ひと」との関わりという点から言えば、西和賀町を訪れた当初は、D児にとって不満をぶつける対象でしかなかった「ひと」が、新たに発見した「こと」を伝える「ひと」になったということである。Cさんが、新たに発見した「こと」を伝える「ひと」になったというのは、新たな「もの」を発見した自分をCさんに見てもらいたいという行為であり、Cさんからの関心を期待する気持ちが込められていると言える。またCさんが、このエピソードを語ったということから、D児の伝えるという行為はCさんによって受けとめられ、CさんはD児が発見した「もの」をD児

と一緒に見ていたことがわかる。つまり、D児とCさんとの間には、当初、一方的な関係しか形成されなかったが、やがて、相互的な関係が形成されたということである。

最後に、D児とD児をめぐる「こと」との関わりという点から言えば、西和賀町を訪れた当初は、D児にとって自分が体験する「こと」を共有したい「ひと」はいなかった。ホームステイで体験する「こと」は、どのような「こと」であってもD児自身にのみ関わる「こと」、すなわち、個人的な関係において生じる「こと」に過ぎなかった。しかし、Cさんが自らの体験を共有したいと思える「ひと」と感じられるようになるにつれ、D児にとって、ホームステイで体験する「こと」は、D児とCさんの共同的な関係において生じる「こと」になったことがわかる。つまり、D児とホームステイの体験という「こと」との間には、当初、個人的な関係しか形成されなかったが、やがて、共同的な関係が形成されたということである。

以上、児童養護施設で育つ社会的養護児童の子育ての社会化において、社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で明らかになった関係形成過程は次の3とおりである。1つは、「もの」との間で無意味な関係から有意義な関係が形成されるという過程である。2つは、「ひと」との間で一方的な関係から相互的な関係が形成されるという過程である。3つは、「こと」との間で個人的な関係から共同的な関係が形成されるという過程である。

4. 考察

西和賀町におけるCさん宅での1泊2日のホームステイにおいて、D児とD児の育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で3とおりの関係形成過程が明らかになった。以下では、このような関係形成過程が認められたということは何を意味しているのか、また、このような関係形成過程が、なぜ認められるようになったのかについて考察する。

4-1. 関係形成過程が認められたということの意味

3とおりの関係形成過程が認められたということとは、何を意味しているのであろうか。既述のように、D児の西和賀町滞在中に、突如として、西和賀町に花が咲き、蝶が舞うようになったわけではない。D児が訪れたときから西和賀町には、花が咲き、蝶が舞っていたはずで

ある。したがって、D児の目に花や蝶が映るようになったということは、D児が花や蝶の存在を認識するようになったということである。つまり、「もの」との間で、無意味な関係から有意義な関係へ変化するという関係形成過程が認められたということは、西和賀町にある「もの」が変化したのではなく、西和賀町にある「もの」に対するD児の認識が変化したことなのである。

また同様に、Cさんの人柄が短い期間に変化したとは考え難い。Cさんが花や蝶を発見した「こと」を伝える「ひと」になったということは、D児がCさんを、自らに関心を示して欲しい人として認識するようになったということである。つまり、「ひと」との間で、一方的な関係から相互的な関係へ変化するという関係形成過程が認められたということは、西和賀町にいる「ひと」が変化したのではなく、西和賀町にいる「ひと」に対するD児の認識が変化したことなのである。

D児が西和賀町で体験した「こと」は、西和賀町における「もの」と「ひと」によって織りなされた体験である。しかも、西和賀町における「もの」と「ひと」に対するD児の認識は変化した。それゆえ、「こと」との間で、個人的な関係から共同的な関係へ変化するという関係形成過程が認められたということは、D児が西和賀町で体験した「こと」が変化したのではなく、D児が西和賀町で体験した「こと」に対するD児の認識が変化したことなのである。

以上から、「もの」との間、「ひと」との間、「こと」との間に3とおりの関係形成過程が認められたということの意味は、D児に認識の変化が引き起こされたということであると言える。

4-2. 関係形成過程が認められた要因

なぜ、3とおりの関係形成過程が認められたのか、すなわち、D児の認識の変化要因は何だったのであろうか。既述のように、D児をめぐる「ひと」との間で相互的な関係が形成され、D児をめぐる「こと」との間で共同的な関係が形成された。相互的な関係や共同的な関係というのは、Cさんが存在しないところで、D児によって単独で形成されるのは不可能である。それゆえ、このような関係形成過程にはCさんの存在が影響していたと考えられる。

同様に、D児をめぐる「もの」との間の関係形成過程にもCさんの存在が影響していたと考えられる。その理由は以下のとおりである。Cさんと一緒に歩いていた

D児は、自分が新たに発見した「もの」をCさんに伝えるとき、「かわいい花が咲いている!」、「チョウチョがとんでる!」とは言わなかった。D児は、「おばさん、かわいい花が咲いている!」、「おばさん、チョウチョがとんでる!」というように、最初に「おばさん」と呼びかけたのである。そこからは、新たな「もの」が発見される契機としてのCさんの存在が浮かび上がってくるからである。

ところで、児童養護施設の子どもが、なぜ排除状態から抜け出せないのかということを研究テーマとしている谷口は、排除の渦中にある当事者が、「現在の生活をどう捉えるかは、生活主体抜きに考えることは困難であり、さらに生活実践上では主体形成が重要な要素となる」(谷口2011:16)と述べている。「現在の生活をどう捉えるか」とは、現在の生活に対する認識を指している。したがって、谷口の議論を援用すると、被虐待の経験を有しているD児に認識の変化が引き起こされた要因を考察するには、D児の主体形成について検討しなければならないことがわかる。

では、D児の主体形成にCさんの存在はいかにして影響を及ぼしていたのであろうか。結論を先取りすれば、それはD児に対するCさんによる「順接の受けとめ」である。ここで言うところの順接の受けとめとは、「こんな、なんにもないところ……」と不満げなD児を前にしたときの、Cさんによる「だからあなたたちに来てもらったの」という、順接の接続詞「だから」に象徴される応答である。

Cさんは、D児の言うとおり、西和賀町にはD児が望むようなものは何もないことを認めた上で、だからこそ、D児たちに来てもらったのだと伝えている。D児の不満は、不満のまま、自分と友人たちの存在が西和賀町にとって必要とされる理由として位置づけられることになった。その結果、D児は、Cさんによってあるがままの存在をまるごと受けとめられる経験、すなわち、存在を肯定される経験をしたのである。

順接の受けとめが、CさんによるD児の存在肯定に結びついていることは、Cさんの応答を一般的におこなわれがちな応答と比較することによって明確になる。多くの人は、不満げなD児を前にしたとき、自分の町の素晴らしさを伝えて、D児の気もちをやわらげようとするに違いない。とりわけ、これから1泊2日の生活を共に過ごすホストファミリーであるならばなおさらであろう。たとえば、D児に対して、「西和賀町にはコンビニも、

ゲームセンターも、カラオケもない。でも、西和賀町の空気はおいしいし、山の緑はきれいだし、かわいい花も咲いているし、チョウチョもとんでる」というように、思いつく限りの西和賀町の良さをD児に向けてアピールする可能性が高い。しかし、このような応答は、「でも」という逆接の接続詞に端的に表われているように、D児の不満を受けとめたものとはなっていない。D児の不満を解消させようとして、D児に対して説得をおこなっているに過ぎない。D児にしてみれば、自分がまるごと受けとめられたと感受するのは困難であり、場合によっては、自分が否定されたときさえ感じるかもしれないのである。

順接の受けとめが存在肯定につながることは、雪あかり³⁾に関する次のエピソードからも言える。下記は、Cさんが、雪あかりの1週間後のホームステイ事業における印象的な出来事として語った(2012年2月19日)、児童養護施設の子どもであるE児(小学校低学年、女児)とF児(小学校中学年、女児)をめぐるエピソードをまとめたものである。

今回は、E児とF児の2人がやってきた。E児には雪を見て外に行きたそうな素振りがみられた。しかし、F児は本を読むのが好きらしく、「私はこたつがいい」と言うので、みんなでこたつに入って丸くなっていた。夕方になり、先週の雪あかりで作ったミニかまくらがまだそのまま残っていたので、「ちょっと外に出てみよう」と2人を誘った。みんなでミニかまくらを修理して、ろうそくの灯をともした。するとF児が、「ああ、きれいだわあ」と言ったので、「だから、一緒につくりたかったんだよ」と話をした。しかしF児は、すぐに「だけど寒いもん」と言ったので、再びまた3人で、こたつに入って丸くなった。

F児は、「だから、一緒につくりたかったんだよ」という順接の受けとめによって、Cさんから存在を肯定される経験をしたのであろう。そのことはF児が、寒いのを我慢して戸外で雪あかりを鑑賞するのではなく、こたつで読書をしたがために、「だけど寒いもん」と素直に口に出したことからも推察できる。

³⁾ 雪あかりとは、毎年2月におこなわれる西和賀町の冬の恒例行事である。町内の家々や施設、または地区で、趣向を凝らした雪像やミニかまくらなどを作り、その一部をくり抜いて中にろうそくを灯して楽しむものである。雪深い地域ならではの行事で、町全体が幻想的な雰囲気に包まれる。

以上をとおして言えることは、Cさんによる順接の受けとめは、D児にとって存在を肯定される経験になったということである。このような存在肯定の経験により、D児に自己肯定感を含む自己概念が形成されたと考えられる。なぜなら、自己肯定感を含む自己概念の形成には、周りにいる人からの承認が必要とされるからである(遠藤・井上・蘭1992)。

このようにみえてくると、順接の受けとめというCさんによる承認をとおしてD児に自己肯定感を含む自己概念の形成、すなわち、そのような自己概念を伴う主体形成がうながされたと言える。そして谷口(2011)によれば、既述のように、主体形成と認識の変化は不可分であるため、D児の認識の変化要因は、Cさんによる順接の受けとめであると考えられるのである。

5. 結論

本研究の目的は、児童養護施設で育つ社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程を、社会的養護児童の子育ての社会化に注目して明らかにすることであった。

「ホームステイ事業」に参加した社会的養護児童のエピソードをとりあげ、「生きられた経験」の観点から分析を加えた結果、社会的養護児童の子育ての社会化において、社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で明らかになった関係形成過程は、次の3とおりであった。1つは、「もの」との間で無意味な関係から有意義な関係が形成されるという過程である。2つは、「ひと」との間で一方的な関係から相互的な関係が形成されるという過程である。3つは、「こと」との間で個人的な関係から共同的な関係が形成されるという過程である。

上記の結果をふまえ、次の2点について考察した。1点、D児とD児の育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で3とおりの関係形成過程が認められたということは、D児に認識の変化が引き起こされたということである。2点、D児の認識の変化要因は、Cさんによる順接の受けとめである。

ところで、「2-2. 調査方法」でも述べたように、D児に関するエピソードは、調査協力者の1人が畑で収穫したばかりのスイカを持参し、それを皆で食べている最中に、Cさんによって語られたものであった。その日の話題は、赤色のスイカを作るつもりで種を播いて育てていたのに、収穫して割ってみると黄色のスイカであった

という話で盛り上がっていた。スイカの話に興じていた調査協力者たちは、Cさんの話を聞いても、とりたてて驚く様子もなく、「んだね」と、そんなこともあったね、というように会話が続けていった。その場の雰囲気から推察されるのは、CさんにとってD児に関するこのような応答は、特別なこととしてなされたものではないということである。また、このようなエピソードは、Cさんだけが経験しているのではなくホームステイのありふれたひとコマであり、ホストファミリーの多くが経験している可能性が高い。

したがって、Cさん以外のホストファミリーから語られるエピソードも重ねていくことにより、西和賀町でおこなわれている子育ての社会化としてのホームステイ事業において、社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間でいかなる関係形成過程が認められるのかについて、広く、かつ、深く検討することができるのではないかと考えている。今後の課題である。

*本研究は、日本学術振興会平成22-24年度科学研究費（研究課題番号：22500707、研究代表者：井上寿美）の助成を受けておこなったものの一部である。

*本稿は、日本保育学会第65回大会（於：東京家政大学、2012年5月4日-5日）での発表内容に大幅に加筆修正をおこなったものである。

【文献】

- 青木秀男（2000）『現代日本の都市下層－寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。
- 網野武博（2000）『「育ち」の力・「育て」の力』『子ども家庭福祉情報』16, 46-49.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千寿（1992）『セルフ・エスティームの心理学－自己価値の探求』ナカニシヤ出版。
- 藤澤 昇（1995）「社会の中で生まれ、育つ学園」『夏季転住物語 さわうち むろね かどのはま 紀行文』みどり学園文集企画部, 9.
- 井上寿美（2012）「子育ての社会化における親による養育責任－子育てに関する責任の所在と担われ方の検討をとおして－」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』16（1）。
- 鯨岡 峻（2005）『エピソード記述入門－実践と質的研究のために－』東京大学出版会。
- 厚生労働省（2009）『平成21年版 高齢社会白書』。
- 森田明美（2000）「子育ての社会化～今、これから」『子ども家庭福祉情報』16, 50-54.
- 日本臨床心理学会（2010）『幻聴の世界－ヒアリング・ヴォイスズ』中央法規出版。
- NPO法人輝け「いのち」ネットワーク（2010）『ホームステイの記録』。
- 谷口由希子（2011）『児童養護施設の子どもの生活過程－子どもたちはなぜ排除状態から抜け出せないのか』明石書店。